広島大学蔵『達磨記・雲隠六帖・あかはたか』

―『聖徳太子の本地』新出伝本としての『達磨記』を中心に（付・『達磨記』翻刻）―

小川陽子

【キーワード】達磨記、聖徳太子の本地、雲隠六帖、あかはたか

はじめに

『源氏物語』の〈空白〉を補い、〈続き〉を描いた作品として知られる『雲隠六帖』は、現存伝本が二種に大別されてきた。版本およびその転写本である一類本（流布本・普通本とも）と、これとは異なる本文を持ち、いずれも写本として伝わる二類本（別本・異本とも）である。すなわち、『雲隠六帖』の写本は、版本の転写本を除けば、いずれも二類本に属するもののみが知られてきたわけである。次に示すように、その数はわずか八本に過ぎない。

＊名古屋市蓬左文庫寄託堀田文庫本「雲かくれ　全」
愛知県立大学図書館本　雲隠巻外題欠（第三巻「さくら人三」、第六巻「八はし六」）
立花和雄氏本「雲かくれ」
早稲田大学図書館九曜文庫本「雲かくれ」
早稲田大学図書館玉晁文庫本「雲かくれ」
内閣文庫本「六帖源氏」
天理大学附属天理図書館本「源氏六帖」
＊堺市立中央図書館本「源氏余編」

このうち、＊を付した二本は稿者がその所在を見出だした(1)ものであることを鑑みると、他にも学界未紹介の伝本が現存する可能性は十分に考えられる。

この問題はおそらく、右の一覧からも明らかなように、この物語が本来は六巻の巻名のみを付しており、統一した作品名としての外題を持たなかった(2)ことが影響しているだろう。たとえば堺市立中

央図書館本が、所蔵先の目録に加えて国文学研究資料館日本古典籍総合目録データベース（現・国書データベース）に収載されていながら、その外題が「源氏余編」とあるがゆえに『雲隠六帖』とは長らく気付かれなかったように、『雲隠六帖』の伝本がそれと把握されないまま現存している例が少なからずあるのではないかと推察される。一類本・二類本の相互関係についてはなお明瞭でなく、新たな伝本の発掘が期待されるところである。

また、伝本と関わる課題のひとつとして、享受実態の解明がある。従来知られていた諸本は、『源氏物語』と一揃いとなって伝来した例を除けば、いずれも『雲隠六帖』という作品単体で書写されたものであった。現存伝本以外に目を向けても、その享受の実態はなお不明な点が多い。(3) この点に鑑みても、伝本の探索は、『雲隠六帖』研究において、引き続き重要な課題として取り組まれるべきものと言えるだろう。

右のような研究状況のもと、新たに見つかったきわめて重要な伝本が、広島大学蔵本（以下、広大本と呼ぶ）である。広大本には大きく二つの特色が認められる。まず、一類本と二類本の中間的な本文を有すること、さらに、他作品二種と合わせて書写されていることである。すなわち広大本は、右に示した二つの課題解明に直結する特色を有する伝本と言える。このうち一点目については、その一端を前稿(4)で論じた。本稿では、二点目について、広大本において『雲隠六帖』と合わせ書写された作品の一つである『達磨記』の概略および翻刻を示し、今後の『雲隠六帖』享受史研究の一助としたい。

一　広大本の書写状況

広大本の書誌についての詳細は前稿を参照されたいが、広大本は仮綴じの一冊本で、『達磨記』『雲隠六帖』『あかはたか』（『達磨記』『あかはたか』の名は広大本の内題に拠る）という三作品で構成されている。末尾に明治三十五〈一九〇二〉年奥書を有するのに加えて、中間部にあたる『雲隠六帖』の末尾にも、寛文九〈一六六九〉年、明治三十二〈一八九九〉年の記載が存する。明治の奥書二つは藤原四郎兵衛という人物の手になるものであるが、この人物については『英草紙』の伝本のひとつにその名が見える他には手掛かりがなく、どのような人物が、いかなる経緯によって、これを入手、所蔵したのかは不明である。

さて、三つの奥書から考えられる広大本の書写・伝流の状況について、前稿では、寛文九年時点で『雲隠六帖』以下が『達磨記』とすでに合写されていたか否かは不明であると述べたが、この点についてまず修正しておきたい。久保田啓一先生の御教示によれば、本の様態から、広大本の書写状況は以下のように考えられる。

・紙の質と大きさ、文字のありようから、一七〇〇年前後の書写本と思しい。

・背の部分の状態から見て、もとは『達磨記』末尾までの一冊本

であったところ、『雲隠六帖』を追加で書写するにあたって紙を足したものであり、同筆ではあるが『達磨記』の書写は他二作品に先行すると判断される。

・『あかはたか』も同筆であるが、わずか一丁分であるため、『雲隠六帖』と同時に書写されたものか否かは判断しがたい。

すなわち、寛文九年奥書は『雲隠六帖』の親本に付されていたものを転写したのであり、同年時点で『達磨記』との合写がなされたものではないと考えられる。『達磨記』を書写・所持した人物が、寛文九年奥書を有する『雲隠六帖』を目にする機を得て興味を抱き、『達磨記』に紙を継ぎ足して『雲隠六帖』を転写したというわけである。広大本の現状からは、『達磨記』という書物の所持者が、それと続けて書写する、すなわちひとまとまりにして手元に置いておきたい作品として『雲隠六帖』と『あかはたか』を捉えたことがうかがえるのである。

先に述べたとおり、従来知られていた『雲隠六帖』の現存諸本は、『源氏物語』と揃いで伝来した例を除くと、いずれも『雲隠六帖』単体の書物である。広大本は、『雲隠六帖』の享受の具体相を知りうる稀有な例と言える。共に書写された『達磨記』と『あかはたか』がそれぞれどういう作品であるのかを検討することにより、『雲隠六帖』がいかなる性質の作品として認識されていたか、その具体例のひとつが明らかとなるのである。

二　広大本『達磨記』とその類本

広大本は、前稿で書誌を記したとおり、二七・三×一八・五㎝、墨付き三十五丁、一面十一行の写本である。このうち『達磨記』は、一丁表から十丁裏四行目までを占める。

「たるまとは天ちくかうしこくの御子也」と始まるこの作品は、達磨が慧思禅師を日本へ遣わしたこと、禅師が聖徳太子として転生し、仏法を広めるために尽くしたことが語られたのち、「我此たひぼんぶの身をすて佛に成事ヲたつね申たき」という問いへの応答という形で達磨が「ほんらいのめんもく」「我と云心」について、歌を用いて答えていく。作品後半は太子伝から離れ、日月の教義などを説くものとなっている。

国文学研究資料館国書データベースに同名の作品は収載されておらず、現段階で広大本の他に同名の書を見出だせていない。しかし、「達磨」を手掛かりとして同データベースを確認すると、酒田市立光丘文庫蔵『達磨大師縁起』および同文庫蔵『達磨大師蓮記』が、それぞれ前半部分に広大本と近しい本文を有することが認められた。(5) さらに、書名はまったく異なるが、『聖徳太子の本地』（『室町時代短編集』『室町時代物語集』(6) 所収）が、後述するとおり収載歌数の相違や本文異同も少なからず存するものの、広大本と同一作品と判断される。『聖徳太子の本地』は、天理図書館所蔵（笹野堅氏旧蔵）の江戸初期写本が天下の孤本とされてきたが、広大本の

出現により、少なくとも他に三つの類本を確認し得たことになる。作品研究の進展が期待されるところである。

天理図書館蔵『聖徳太子の本地』（以下、天理本と呼ぶ）は、『室町時代物語集』解題に拠れば、はじめの六丁分が切り取られているものの、現存部分だけで首尾完全していると推定されている。同書について大島由紀夫氏[7]は、

末尾は、「そけい」なる者が安芸国の母の許へ差し出した書簡の形式で結んでいるが、冒頭部の六丁分を欠くため、全体像は判然としない。書名も本来備わっていたものかどうか疑義がある。

と述べておられるが、広大本および光丘文庫本も同様の始まりを有するため、冒頭部はこれが本来の形であったと判断して良いだろう。天理本の冒頭六丁は、他の作品が記されていたものと推察される。あるいは、後述するとおり末尾の「そけい」による書簡らしき表現は天理本のみが有するため、これと対応するような冒頭部が独自に置かれていたのかもしれない。今後、四伝本を仔細に検討していく中で、改めて問われるべきところであろう。

一方、書名に関しては、大島氏[8]が別稿において次のように指摘しておられる。

・題名は表紙に「しやうとく太子の本地」とあるが、所謂「本地物」ではない。

・本作は、冒頭で簡略な太子伝を述べ、改変した片岡山説話に続けて、作者に関心のあった仏教の教義上の問題をいくつかとりあげ、その要所要所を釈教歌によって示していこうとしたものであるが、太子伝の部分とそれ以下がうまく連結しておらず、「しやうとく太子の本地」というタイトルと作品内容の間には大きなずれがある。そもそもこのタイトルが本来備わっていたものかどうかも疑問として残ろう。

この御指摘はもっともなところで、同氏[9]が「お伽草子の本地物諸作品の書名で、「～の本地」とするものは近世に入ってからの写本・刊本に多くみられ、室町以前の写本は「～縁起」「～物語」とするものが殆どである」と述べておられる点なども思い合わされるところである。先述のとおり、広大本および光丘文庫本二種は、いずれも作品名に「達磨」を冠している。今後、四伝本の内容を突き合わせ、作品全体を覆うものとして「聖徳太子」と「達磨」のいずれが適しているのか、あるいはいずれもが本来的な書名とは見なしがたいのか、考究していくべきであろう。

三　天理図書館蔵『聖徳太子の本地』との相違

①書簡形式について

天理本についてはすでに翻刻および研究がなされてきたため、先学に導かれつつ本文をごく簡単に比較し、広大本の位置を確認することとしたい。

まず、両本の最も大きな相違点は、天理本末尾部分に相当する本

四

文を広大本が欠くことである。大島氏[10]が示された天理本概要のうち、「⑧後生の大事。⑨阿弥陀の請願のこと。⑩六字名号の解釈。等々」に関する記述が広大本には見えない。また、このように末尾部分を欠くことにより、天理本における「そけい」なる人物から「安芸の国の母の御方への御返事」という書簡の形式を、広大本は持たないことになる。

「そけい」による書簡という形をとるありようは、『聖徳太子の本地』の成立を考える上で重要な点であり、先行研究でも必ず言及されてきたところであるが、この形式について大島氏[11]は、

これが本当の書簡であったのか、虚構であるのかは判然としないが、いずれにしても書簡としての首尾は一貫していない。

と指摘しておられる。これに対し、類本と見られる『達磨大師縁起』および『達磨大師蓮記』は、後生の大事から六字名号の解釈までの記述を天理本と同様に有するものの、天理本最末尾における、

らいねんの春のころ、かならす、まかりのぼり、げんざん申へきもの也　　そけい

あきの國のはゝの御かたへ御返事

という書簡らしき文言は、両本ともに見えない。すなわち、四本を対照すると、書簡形式となっているのは天理本のみということになる。その天理本においても、大島氏の御指摘のとおり他の部分に書簡らしさはうかがえないことを鑑みれば、末尾の「そけい」から母に宛てたと思しき部分については、この作品本来のものではなく、転写の過程で付加された可能性が高いのではないだろうか。

四　天理図書館蔵『聖徳太子の本地』との相違

②本文および和歌について

さて、広大本と天理本は基本的に同一内容の作品であるが、本文異同は少なからず存する。冒頭を例にとると、以下のような状況である。右に広大本、左に天理本を記す。相違点を把握しやすいよう、私に改行し、該当する文字が存しない場合は「・」で示した。

広大本　たるまと・・は天・ちくかうしこくの・・御子也・
天理本　だるまと申佛(ほとけ)はてんぢくこうしこくの王(わう)の御子なり

しやかより五百年後・の佛也・
しやかより五百年のちの佛なり

けいつはしやかより廿八代めの御てしなり
けいすはしやかより廿八代めの・でしなり

天・ちくよりたいとうゑわたりてりやうのぶていといへる玉ヲ
てんぢくよりたいたうへわたり・りやうのふていと申・・王を

てしにとり給ひて・・・・・佛法ヲひろめ給ふ・
でしにとり申・てもろこしに佛法（ぶつはう）をひろめ給ふ也

開始早々、天理本にある「申佛」という文言が広大本には見えないように、両本の間には、漢字仮名の相違に留まらない異同が確認できる。また、作品中盤の「こいとひとつによむ哥」（広大本六オ5行目～六ウ5行目）あたりは天理本と大きく本文が異なり、終盤の「扨日月と申は」（天理本）あたりは広大本に見られない本文を天理本が有する（広大本十オ8行目に相当）、等の大きな異同も見受けられる。

また、大島氏[12]が「達磨の詠歌・太子の五位歌を含め、全部で三七首の釈教歌を収めており、作者の興味・関心は釈教歌を並べあげていくことにあったと考えられる」と述べておられるとおり、この作品では和歌が重要な位置を占めているが、広大本と天理本では、和歌の掲出順が異なる場合があることに加えて、収載歌数も異なっている。天理本は右の大島氏解説にあるとおり三十七首を有するが、広大本は四十七首あり、総歌数で天理本を十首上回る一方、天理本掲載歌のうち二首を欠いている。和歌を主体とする短い物語においてこれだけの相違が存するのは看過しがたく、今後の作品研究において、『達磨大師縁起』および『達磨大師蓮記』をも視野に入れた考究がなされるべきであろう。

おわりに

本稿では、広大本『雲隠六帖』と合本となっている二作品のうち『達磨記』について、『聖徳太子の本地』と同作品であること、類本がさらに二本現存することを明らかにした。天理本『聖徳太子の本地』は天下の孤本とされてきたが、今後は四伝本による研究が可能となる。天理本以外はその題名に「達磨」を冠するため、従来の『聖徳太子の本地』研究ではその現存を見出だし得なかったものと思しい。今後、「達磨」を冠した草子の博捜による、さらなる伝本の発見も期待されるところである。

『雲隠六帖』の問題に立ち戻ると、釈教歌を主体とし、「特に曹洞宗に縁故の深いもの」[13]とも指摘されている作品と合本となっていることは、この物語の享受を考える上で非常に重要な点である。『達磨記』の和歌、さらに広大本末尾に写された『あかはたか』の和歌をも視野に入れた『雲隠六帖』の享受については、別稿を用意している。[14]本稿は、『雲隠六帖』享受史研究の一階梯として、広大本『達磨記』の位置および本文を示したものである。

〔注〕

(1) 拙著『『源氏物語』享受史の研究　付『山路の露』『雲隠六帖』校本』第二章第二節（二〇〇九年、笠間書院）、拙稿「堺市立中央図書館蔵『源氏余編』――『雲隠六帖』（二類本）新出伝本の紹介

と翻刻（一）―」（『岐阜大学教育学部研究報告　人文科学』第六九巻二号　二〇二一年三月）、拙稿「堺市立中央図書館蔵『源氏余編』―『雲隠六帖』（二類本）新出伝本の紹介と翻刻（二）―」（『岐阜大学教育学部研究報告　人文科学』第七〇巻一号　二〇二一年一〇月）

(2) 拙稿「堺市立中央図書館蔵『源氏余編』―『雲隠六帖』（二類本）新出伝本の紹介と翻刻（二）―」（『岐阜大学教育学部研究報告　人文科学』第七〇巻一号　二〇二一年一〇月）

(3) その一端は、前掲注(1)拙著第三章にて検討を行った。

(4) 拙稿「『雲隠六帖』諸本共通祖型に迫る―新出・広島大学蔵本の位置―」（『国文学攷』第二五四号　二〇二三年六月）。以下、前稿と呼ぶ場合はこれを指す。

(5) 両書の本文は国書データベースによって確認した。『達磨大師縁記』（酒田市立光丘文庫所蔵，https://doi.org/10.20730/100145336）、『達磨大師蓮記』（酒田市立光丘文庫所蔵，https://doi.org/10.20730/100145347）

(6) 『室町時代短編集』（一九三五年、栗田書店）、『室町時代物語集』第四（一九四〇年、大岡山書店）。なお、『聖徳太子の本地』の引用は、『室町時代物語集』に拠る。

(7) 大島由紀夫氏「聖徳太子の本地」（『お伽草子事典』二〇〇二年、東京堂出版）

(8) 大島由紀夫氏「法談の物語草子―しやうとく太子の本地―」（『国文学解釈と鑑賞』第五四巻一〇号　一九八九年一〇月）

(9) 大島由紀夫氏「本地物」（『お伽草子事典』二〇〇二年、東京堂出版）

(10) 大島氏前掲注(8)論

(11) 大島氏前掲注(8)論

(12) 大島氏前掲注(7)論

(13) 笹野堅氏『室町時代短編集』解説（一九三五年、栗田書店）

(14) 拙稿「『雲隠六帖』の和歌」（『国語国文』九四巻二号〈二〇二五年二月〉掲載予定）

〔付　記〕貴重なご教示を賜りました久保田啓一先生に深謝申し上げます。本研究は令和六年度広島大学女性研究者奨励賞の助成を受けたものです。

《翻刻》広島大学蔵『達磨記』

〔凡　例〕

広島大学蔵『達磨記』（請求記号9102/D42）を翻刻する。同本は『雲隠六帖』および『あかはたか』と合本となった一冊本であるが、紙幅の都合上、本稿では『達磨記』のみを取り上げる。ほか二作品については他日を期したい。翻刻に際しては、底本に忠実であることを心がけたが、製版・印刷上の都合と通読の便宜とを考えて、次のような方針に従った。

一、底本の変体仮名は、すべて現行の字体に統一した。漢字については、できるだけ底本の字体の再現に努めた。
一、見せ消ち訂正がある場合は、見せ消ち符号を付された文字に抹消線を施した。
一、虫損、汚損等により判読不能の文字がある場合は、その個所を□で記した。
一、改行は、底本のとおりとした。丁の切れ目を（〇オ）、（〇ウ）のように示した。

〔翻　刻〕

（一オ）

達磨記

たるまとは天ちくかうしこくの御子也しやかより五百年
後の佛也けいつはしやかより廿八代めの御てし
なり天ちくよりたいとうゑわたりてりやうのぶてい
といへる玉ヲてしにとり給ひて佛法ヲひろめ給ふ
その時たひとうにゑしせんしと云人有達广ゑし
せんしにのたまふはこれよりとうかいのす□□
日本と云国有此國は佛法いまた出さる也ゑし
せんし日本ゑわたりて日本の者ともを□□
給ふへし此國にはきちくなとの□□□□□□□□

（一ウ）

世をもしらさる也日本のしゆしやうふひん也との□
まへはゑしせんし此よしきこしめし日本へわ□□
給ふそのはしめヲかんかふるにしやかねはんより一千
九十四年也我てうの人玉をはしめ卅二代めのみ
かとをはやうめい天玉と申奉る也十月十三日かのと
のとりの日はくさいこくよりしやうめい天玉日本
こんくのふそうならひにほけきやうヲわたさるゝ
也されとも日本の人これヲみしらすやうめい天玉の
后夜ことにこかねのふつそうふところに入と夢に
みたまふすなはちくわいにんしたもふきんくわう
三年正月朔日にたん生也御名ヲしやうとく太子

（二オ）

と申也そうの御手ヲにきつて生れ給ふかつゐ
にひらき給はさるゆへやうめい天わう后ヲはし
め奉りその外くけ大臣にいたる迄をの〳〵
御かたわのよし御なけき有六さい迄そたち給ふ
六歳の春の比父つれ奉り給ひてはくさい國よ
りわたりたる佛そうとほけきやうヲ御覧し
てあの佛こそむかし天ちくりうしゆせんにて八万
人のたいしゆヲあつめ四十九年一さい経ヲとき給也

そは成経はほけきやうと云しかもけちゑんふかき
経也あの佛ヲおかみあの経ヲよむ人は此世にてはけん
せあんをんにしてゑくわにさかへ来世にてはこくらく

(二ウ)

しやうとにをちつきそのくりきにより今度
生るゝときは有ひは天下の玉と生れあるひは國
主と生ゑいくわにさかゆる也とのたまふその時
父天わうふしきの思ひをなし仰けるはなんち
六歳迄郭の内ヲさへしらぬ身の何とて天ちく
たいとうの事ヲくわしく覚へけるそと仰けれ
はその時太子のたまふはむかし我は天ちく
にてしやかの御せつほうの時十たい御てしの
うちふるなそんしやとはわか事也たいとうへ
生れゑしせんしとて佛法をひろめたる也此国へ
法ヲひろめんかため御身の子と生れ來たる

(三オ)

なりとてその時にきり給ふ御手ヲはしめて
ひらき給へはこかねの佛有父きとくの思ひヲなし
これはいか成物そと仰けれはしやうとく太子仰ける
はこれしやかのしやり也とのたまふ天わうヲ
はしめ公家てん上人にいたる迄いよ〳〵あか
め給ふその時のしやうくんはもりや大臣と申
けるかのもりやことの外佛法ヲきらい後世をも
ねかわす大あくきやうヲもつはらとす太子つね
にいさめ給へ共これヲもちいすやまとの国に
たてをつき玉いにむかい弓ヲひくしやうとく太子
我とかぶとをきせめ給ふによつてついにもりや

(三ウ)

をたいしたまふその後心のまゝに佛法ヲひろ
め日本に寺〳〵ヲこんりう成ける天ちくにては
大ば佛にさかしらをなし奉るたいとうにては
ゑしやう玉ととうし出家と云物佛法にしやうけ
をなす日本にてはもりや大臣佛法にさまたけヲ
なす扨しやうとく太子とたるまとぜんしやうの
けいやく有ゆへ日本にわたり給ふ也郭にてかた
をか山にて達广御門にさんくわい成そのついて
に太子達广にとひ給ふ人間は八くとて後世
大事のよし我此たひぼんぶの身をすて
佛に成事ヲたつね申たきよし仰けれは達广

（四オ）
こたへ給ふはそれ成佛とくたつのむねと申は
ほんらいのめんもく我と云心なり我と云心ヲ
さへさとりたまは丶佛にならせ給ふへしほん
らいのめんもく我と云心はさていかなる物そと
朝夕さしをかすゆたんなくあんし給へしとし
めし給ふ御門それよりたるまの仰にしたか
いてさま〳〵にほんらいのめんもく我と云心ヲ
あんし給へ共ついにさとりたまはすその時達广
仰けるは御身はぜん生に佛のしやうヲへんして
玉いにはならせ給へ共ぞくたいならせ給へは男女
のたわふれかれこれあひよくのゑん心ふかくして

（四ウ）
しやうしのきつなはなれがたしさりなから本朝
には哥の道有てたけき心もやらくこと
有ほんらいのめんもくと云事を哥によみ
てわたすへしとて此哥ヲ便にして我と云心
をさとり給へしとてこしやう大事の哥ヲ
さま〳〵奉り給ふ
　我むねに有し佛ヲ知るならはいか成とかも我ときゆへし
　我むねに有し佛ヲしらすして外ヲたつぬる人そはかなき

さりもせすきたりもやらぬ此佛いつもたへせすむねにこそあれ
　我心はかたちなけれはみへもせすみへぬそもとのすかた成けり
　消もせすきたりもやらぬ法の道これそ誠のしやうと成へし

（五オ）
影もなくかたちもみへぬ物なれとその面かけはむねヲはなれす
　我心は空よりいて丶空に入空こそもとのすみか成けり
神は神佛は佛我は我おさめてみれはむねにこそあれ
　我心は人よりとらぬ物なれは我と〳〵にふかくたつねよ
　我心ヲたつねてみれは何もなし柳はみとり花は紅花
これおもての哥也たいしこの哥ヲ御覧して弥々御心
さしふかくして我と云心ヲたつねあんし給ふ
またはる〳〵後にとうけんといひしちしき
此哥ヲ御覧して此哥計にては人間まよひの心ふかく
してほんらいのめんもくはさとりかたしとて
こいと云ヲこまかによみて此哥のうちゑそへられ

（五ウ）
けりこいと云物はたいとうとうさんおしやうね
はん経のうちよりつくり出し給ふ
　こいのすにいわく
しやうちうへん　これは人ノ生る丶時也十二時に合すれは朝ほの也

生れては心なきこそ佛なれ色かをとめはちこく成へし
へんちうしやう　これは人の死る時也十二時に合すれは日のくれ也
　生るゝも死るも同心かなよきも悪布もわきまへはなし
しやうちうらい　夜るノやはん也我むねに有をと云心也
ほんらいのめんもくの哥に
　生るゝも死るもそれは偽よ我さへむねの佛成せは
けん中三　ひるのまん中也　げんざいの事

（六オ）
　いやしきもいやしからぬもをしなへてひとつに照す老のかけかな
けん中とう天地ひらけぬ以前人間と生れぬさきの事也
天とも地とも哥よりはしまりて又哥におさまる也
　晦日は月日のかけもなかりけりそれこそそれよ人のはしまり
　　こいとひとつによむ哥
　出入の心の道ヲかそふれは人ヲたすくる月日成けり
我と云心は人ことのむねにたへすあれとも人間悪
心にひかれて迷ひの雲にて我むねに有佛ヲしら
すしさて我といふ心はいかてかあふへきとたひ
くつの心なく此世はかりの宿成に我心ヲさとらん
とゆたんなく心におもはゞかならすさとるへし

（六ウ）
ほんらいのめんもく我と云心ヲさとれはほんふもなく
則佛也さりなからたゝはさとりかたしせん我
とおほへす命ヲうしなふ程のとうてんにあわ
すはさとりかたしほんらいのめんもくわれと云心
とてもかくへつの事なし日月の二つ也されはしゆ
みと云山は十六万余しゆん也月日よりうへか八万
余旬也しゆみの南はなんせんふしやうとてあまた
の国有しゆみより北ヲはほくろくとておほくの國
ありしゆみのはんふくヲめくり給ふ也日のしゆみ
の南ヲめくる時は月はしゆみより北ヲめくる也
その時南は昼にて北は夜也日のしゆみより北ヲ

（七オ）
めくる時は月はしゆみより南ヲめくる也そのとき
南夜るにて北は昼也月と日は少もとゝまる事なく
めくる也卅日に一度晦日の夜月日ひとつに成給ふ
はくゑのとうしとて十五たひこくゑのとうしとて
十五たい月そう佛有月は二日のばんより出給へは
二つ入ゆへにりやうの手さきとなつて三日月と
成は夜ことにひとつつゝ入給ふそれによりて月
も光ヲます也十五日のばんは十五たいなからみな

入ゆへに有明にてひるよりも明也又十六日のばんよ
りはくゑのとうし月のわのうちよりはつれはく
ゑのとうし月のわのうちへ入月の光したひにう

（七ウ）

すく成也晦日のばんには十五たいなからこくゑのとう
し入ゆへに月の光うせてくらき也しゆみのいぬ
いのすみにみやうあん月と云あな有南のあなは
あかるく北のあなはくらし入あなは二つなれとも
そこは一つ也卅日に一度晦日の夜日はみなみの
あかきあなより入給ふ月は北のくらきあなより
入給ふ也あなのうちにて月日ひとつに成給ふ晦日
朔日の夜日月くわひかうして卅たいの佛ヲうみ
給ふ白佛十五たい日の入あなのうへに南にむ
かいて立くろき佛十五たひ月の入あなのうへ
にたつ月みやうあん月の内にて卅たいの佛ヲ

（八オ）

うみ二日のあか月より出給ふ其光によりて北
のかたのくろき佛大せんせかいゑ人たねにふり
給ふその時くわい人すれはかならす女をうむ也
女は月のせい成ゆへ也そこ色くろし又こんとの二日に
は日月の光にそへて白き佛十五たい大千せ
かひゑ人たねに生れ給ふその時くわい人すれは
男也こゝの哥に
　月と日とみそかの契りなかりせは人のたねには何か成へき
これぐち成人にうたかわせま布ための哥也まつ人
たねと云ものは男の身に三月やとる也母のた
いないに移りて九の月に三月そへれは十二月也

（八ウ）

人の内にほねは大小に三百六十有又日の数も三百六十
日也これも人間には少もかわらぬ也後世ねかわんと
思ふ人はしやかより此かたのけちみやくをたもつ
へしそれけちみやくは上下ヲあけ中に計しやか
をはしめ奉りその外の佛の御名ヲ書てその下
にたもつ人の名ヲ書也けちみやくの白は日ヲ
かたとる也下のくろきは月ヲかたとる也人生れ
たる時をほきぬとてあかき物ヲつくる也これは
日の光ヲかたとる也又人死る時かたひらヲきせて
おくる也けちみやくの下の白ヲとる也これはすなはち
月の光ヲまなふ也たいまつヲ二本をく事

（九オ）

一本は日一本は月をかたとる也又哥に
我とよひ我とこたふる外にこそ誠の主はあらはれそする
夢の世に夢のうき身を夢にみて夢ヲ夢そと云も夢かな
生るゝにつれて生れて生れぬは死るにつれて死ぬものかな
我心は散らすしほまぬ花なれはこれそ誠の佛成けり
夢ヲみて夢ヲ忘るゝ心こそ誠の道のはしめ成けり
雨土のひらけぬ先もひらけてもたゝ此心いつもたへせす
人ことのむねは月日の宿なれは迷ひの雲のかゝることなし
行水に移ふ月のかけ見れはわかむないたの佛也けり
我と云心ヲ何とさとるへきたゝ三日月のかけヲみよかし
こくらくヲ遠くねかふははかなけれおとろく時のむねにこそあれ

（九ウ）

あさかほの花よりもろき身ヲもちて心の我にあわぬつらさよ
我もなく人もなかりしあはらやにまとより匂ふ梅の花かな
我もなく人もなきさのうつほふね水たまらねは月もやとらし
すさましやねやのうつみ火かき消てはいもぬくまぬ暁の袖
身はたき木たきゝもつきて消る火のくらきそもとのすみか成らん
あたになく露にうつろふ月かけのこほれてもとの空にすむ哉
佛ヲは有と思へは偽や心て心こゝろすつへし
花ヲ花月ヲ月そと見る人の心なきこそ道の道なれ

又こいのかけ哥　しやうちうへん哥
ほの〳〵と明る戸ほそのうちみれはみえつかくれつ面影そする
又へんちうしやうの哥

（十オ）

内よりも外こそくらきたますたれ主とても無玉のとこかな
しやうちうらい
ひとりきてひとり帰るも迷ひかなさらすきたらぬ道をしへせん
けんちうしの哥
雪しろく月さへわたる夜すからはかけもかたちも無人そしる
けんちうとうの哥
何事もおもわぬ先の古里に帰る心は佛成けり
こいのうらおもてかわり
日は右に月は左のむねにいて我と〳〵に逢そうれしき
月と日を我身の内にをきなから佛ヲたつぬ人そはかなき
月と日をわか身のうへに置けれは今のきたうと成そうれしき

（十ウ）

我心ヲさとりし人のたましいはめうあん月の内にをさまる
佛とそおとろく時のむね成ヲ外ヲたつぬる人そはかなき
みゝてみてめて聞ならはうたかわしふかぬあらしの松かせの音
我むねに三つ有物の名ヲしらは佛と我とへたてあらしを

A Bibliographical Introduction to *Darumaki*, *Kumogakure Rokujo*, *Akahataka*

Yoko OGAWA

Kumogakure Rokujo is a tale that supplements *The Tale of Genji*. The circumstances of the succession of this tale remain largely unknown. This paper reports on a newly emerged manuscript of the tale that has been added to the collection of Hiroshima University.

Unlike other previously known manuscripts, the manuscript owned by Hiroshima University has been copied together with other works. Since the manuscript consists of three works, *Darumaki*, *Kumogakure Rokujo*, and *Akahataka*, it is possible to delve into one example of how *Kumogakure Rokujo* was recognized by exploring the characteristics of *Darumaki* and *Akahataka*. For this reason, this paper presents an outline and reprinting of the *Darumaki* with a view to providing support for future research on the *Kumogakure Rokujo*.

It is now clear that *Darumaki* is the same work as *Shotoku Taishi no Honji*, of which only one copy has been known in preceding studies, and that two other similar copies of *Darumaki* exist. In this respect, the manuscript owned by Hiroshima University is quite valuable.